



ヘイトクライムの多面性

～後編～

住民間の「ヘイト*1」を生み出すものは何か？

約5年前、私はレキシントン町の行政委員の委託でこれらを調査し建設的な対話への対策を提案するボランティアグループに参加した。私以外の委員は大学の社会学の教授や元教育委員、引退した企業の重役などで町のボランティア歴も長い。PTA程度の経験しかない私がこのようなグループに誘われたのは、行政委員が移民の観点を取り入れたいと願ったからである。

この委員会を含むボランティア経験から私が学んだのは、少なくともレキシントン町では「肌の色や英語の訛りといった表面的な差異に基づく偏見、他文化への無理解、白人優位主義がヘイトを生み出すと単純に結論づけるのは過ちである」ということだった。この町の軋轢や対立の多くは、むしろ個人の価値観の差から生じているのだ。

◆◆◆

この町で住民の対立が際立つのは、「Override (オーバーライド)」住民投票前の数ヶ月である。YES (賛成) 派対NO (反対) 派のキャンペーンが激しくなるにつれ、対立する派を中傷するチラシがまかれ、自宅の前に掲げたサインが盗まれ、隣人同士が怒鳴り合う不愉快な小事件が多発する。

このオーバーライドとは、固定資産税の値上りを年2.5%以内に押さえる(もっと複雑なのが割愛する)というマサチューセッツ州が定めた「Proposition 2 1/2」という条例を各自治体の住民投票で無効にし(Override)、税収入を増やして必要な出費をまかなうことである。

日本人の私たちにとって驚きなのは、地方自治体の行政費の大部分が自給自足であり、特に公立学校の運営費が町全体の歳出で大きな割合(レキシントン町では6割前後)を占めていることである。しかも、レキシントン町は住環境を優先して商・工業用地を限定しているので歳入のほとんどを町民の固定資産税に頼っている。問題は、光熱費、健康保険を含む教師の人件費、特殊教育費の上昇により、過去には校舎の修復などの特別なときにだけ必要だったオーバーライドが現在ではほぼ毎年必要になっていることだ。

オーバーライド賛成派と反対派の衝突の原因は価値観の違いにある。まず両派では公立学校のあるべき姿と最低基準が異なる。賛成派は、「公教育は民主主義でもっとも重要な部分であり、町はすべて

の生徒に才能を発揮できる教育の場を与える義務がある」と考えるが、反対派からよく聞く反論は、「公立学校は読み書きを教えればよい。音楽や芸術を学ばせたいのならば私立学校に通わせるべきだ」というものである。次に教育の優先度も異なる。高齢者が多い反対派が求めるのは「教育重視の町」ではなく「住民が公共に奉仕し、互いに助け合う」昔ながらの町である。また質素節約を美德として育った彼らは、公立学校が無駄遣いをするからオーバーライドが必要なのだと信じるきらいがある。

◆◆◆

町の人口統計上の変化も住民感情に影響を与えている。

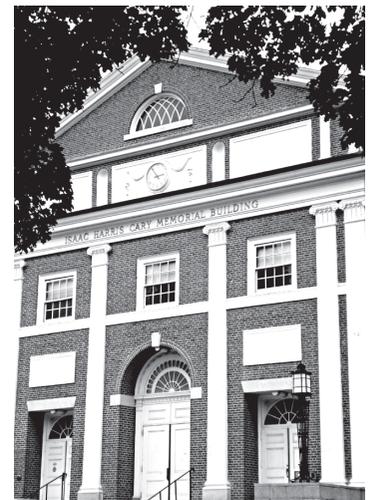
つい最近まで、レキシントン町では教師や警官が引退して家を売るときには地元の若い教師や警官がそれらを購入したものである。ところが、2004年にはレキシントンの一軒家の平均販売価格は83万2千ドル(約9千万円)に上昇し、町で働く若い教師や警官の給料でこれらの家を購入することは不可能になった。

彼らかわりにそれらの家を購入しているのが、優れた教育を求めるアジア系移民と高収入の若い夫婦である。彼らは自分の収入とわが子の成績に直結する活動には労力を費やすが、これまで地元出身者が進んで引き受けてきたサッカーのコーチやPTAといったボランティアには尻込みする傾向がある。オーバーライド賛成派の中心人物たちは学校や町のボランティアを誰よりも多くこなしているのだが、反対派の旧住民たちの目に入るのは「わが子をよい大学に入れたい利己主義の親」だけであり、「そんな者のために高い税金を払いたくない」という反感が強まるのである。

◆◆◆

知人でユダヤ人の元教育委員が自宅の前庭にオーバーライド賛成のサインを立てていたところ、隣人に「この町の公立学校の成績がよいのは単にユダヤ人と中国人が多いから。学校にかかる金額は関係ない」と怒鳴られた。最初にこの話を聞いたときはショックだったが、そのうち、この差別的な発言には、自分たちの経済・社会・文化的遺産を受け継ぐ者を追い出した新住民のために生活を切り詰めて高い税金を払わなければならない憤りが込められているのではないかと思うようになった。

だからこそ、先月号で香港出身のコニーさんが主張したように真っ向から「人種差別だ！」とこれらの人々を糾弾するのは見当違いだけでなく効果がないのである。なぜなら、このヘイトは特定の人種への偏見というよりも、ある集団が代表する価値観の差に対するヘイトなのだから。



わたなべ ゆかり・一九六〇年兵庫生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経る。二〇〇一年、『フリーティアーズ』で第七回小説新潮長編新人賞を受賞。二〇〇三年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

*1 憎しみ(Hate)。ここでは、ヘイトクライムの元となる偏見、差別、蔑視といった感情を指す。ヘイトクライム(Hate crime、あるいはBias crime)とは、ある人種、宗教、性愛の有様など異なる「集団に対する偏見・差別・蔑視」感情などが元で起こされる犯罪行為、とくに暴行、脅迫、殺人などの暴力犯罪を指す(ウィキペディア)。前編「バトルグリーンVol.4」(『たからまがじん』2007年夏号掲載)をご参照ください。

※ 文中の登場人物は例外を除いて全て仮名です。